

第7回多摩薬業連携フォーラム報告

患者を交えた薬業連携フォーラム

多摩薬業連携協議会

阿部 宏子, 下平 秀夫
奥山 清

当協議会は、平成14年4月、東京・多摩地区に発足した。当協議会の会則ではその目的を、「本会は多摩地域の薬剤師相互の交流を図り、医療の発展に貢献することを目的とする。」とし活動内容は、「(1)医療分業に係る連絡・協議、(2)研修・研究会、(3)その他」と規定している。参加しているのは、多摩地区の基幹病院の病院薬剤師と、南多摩地区の保険薬局より選出された薬剤師である。活動としては、隔月の協議会開催と年2回のフォーラムを開催している。

【ホームページでの情報提供】

平成15年4月に本協議会のホームページ (<http://www.shimo-web.com/tamayaku.htm>) を開設した。開設の目的は、地域の薬剤師への本協議会の活動の周知および、本会新任委員への経緯説明である。掲載内容は本協議会の会則（設立の趣旨、目的を含む）、委員名簿（次頁より掲載）、これまでに開催した全ての協議会（第1回～19回）の日付と議事録を掲載している。

フォーラムについては、第1回～第7回のプログラムと写真が掲載され、次回のフォーラム開催

案内を掲載している。さらに、本会を紹介した論文、参加レポート、記事を掲載している。ホームページを開設したことで情報の共有が可能となり、薬局薬剤師、病院薬剤師の連携を深めている。日々の情報交換はメーリングリストで行われている。

【フォーラムの開催】

発足して1年3ヵ月が経過した平成15年7月には第1回目のフォーラムを開催した。薬業連携フォーラムの第1回は「多摩薬業連携協議会設立の説明」、第2回は「薬・薬連携の現況と問題点」、第3回は「地域薬局の立場から」、第4回は「処方せん疑義照会のあり方」、第5回は「お薬手帳の現状と課題」、第6回は「お薬手帳の現状と課題」をテーマに開催した。

【第7回は、患者を交えた薬業連携フォーラム】

平成19年5月29日に八王子都市センターにおいて開催した第7回多摩薬業連携フォーラムは、初めての試みとして市民を交えた会であり、大変好評を得た。メインテーマは「入退院における連



薬局薬剤師の発表



市民の方（患者）の講演

携」, 参加人数は, 市民が17名, 薬局薬剤師が46名, 病院薬剤師が14名であった。

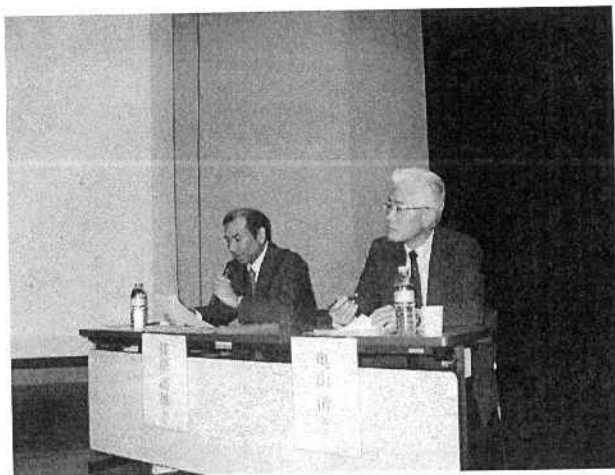
パネリストとして, 「入院中から退院までのお薬手帳を使用したお薬の説明」を南塚敬子氏(恩方病院薬剤部), 「自分のお薬をもっと知りましょうーお薬手帳の使い方ー」を渡辺千鶴子氏(明神町調剤薬局), 「抗菌剤による副作用(肝機能障害)を経験した」市民の方, 「心疾患治療薬服用中」の市民の方, また, 「患者さんの薬に対する不安と要望」を青梅市立総合病院梅の会(糖尿病)副会長からご発表をいただいた。

その後, 活発なパネルディスカッションがあり, 会場は質疑応答で大いに盛り上がり, 病院薬剤師, 薬局薬剤師双方への期待の大きさを実感した。

【患者さんの薬に対する不安と要望】

青梅市立総合病院梅の会が実施したアンケート結果が第7回フォーラムで紹介された。その一部を以下に紹介する。

- ・ 複数の薬を常用していると, 飲み合わせによる有害な影響が出る可能性があるか, 大丈夫なのか, 凄く不安になる。
- ・ 薬どうしの飲み合わせの相互チェックを強化していただきたい。
- ・ 複数の薬を常用していると, 副作用が出たとき, どの薬が原因で具合が悪いのか, どう対処したらよいのか, 困ってしまう。
- ・ 副作用の内容と自己対処法の指導をしていただきたい。
- ・ 薬はなるべく少なくして欲しい。飲みきれず, あまってしまう。
- ・ 何時に何錠飲むのか, 飲みにくい薬は飲みや



座長

すい薬にしてもらいたい。

- ・ 「お薬手帳」を配布してもらいたい。薬の重複や飲み合わせ等をチェックしてもらいたい。
- ・ 一人暮らしのお年寄りに対する投薬等の援助, 指導をしてもらいたい。

他にジェネリック医薬品の普及促進についてや投薬ミス撲滅についての意見が挙がっていた。

活発な意見交換により薬を服用している市民の方々の体験談やご要望をお聞きすることが出来, 市民と医療機関との距離が少し近づいたように感じられた。また, 今後このような市民フォーラムを開催し, さらに薬・患者・薬連携を強化したいと考える。

多摩薬薬連携協議会構成

都薬八王子支部

茂木徹・渡邊清司(八王子薬剤センター薬局)
堀博昭(公園前薬局)

北多摩支部

加藤智恵子(立川調剤薬局)
下平秀夫(富士見台調剤薬局)

南多摩支部

斎藤伸介(北野調剤薬局桜ヶ丘店)
山田哲道(あかつき薬局)

西多摩支部

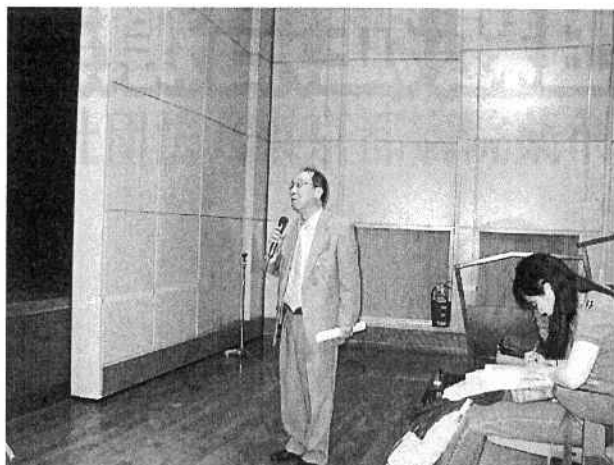
針生暎郎(西多摩支部管理センター)

病薬多摩東支部

村田和也(日本医大多摩永山病院)
吉尾隆(桜ヶ丘記念病院)
田中三広(青梅市立総合病院)
鈴木節子(多摩南部地域病院)
篠原高雄(杏林大学病院)



パネルディスカッション風景



質 疑

亀山邦子（稲城市立病院）

病薬多摩西南支部

奥山 清（東京医大八王子医療センター）

阿部宏子（恩方病院）

上野雄一郎（町田市民病院）

阪本康典（国家公務員共済立川病院）

南 徹夫（日野市立病院）

薬科大学委員 山田安彦（東京薬科大学）

相談役（確認中）

谷口廣光（都薬理事）

村田正弘（明治薬科大学）

明石貴雄（東京医大病院）

藤本 越（都薬支部長）

渋谷弘治（都薬業務課長）

なお、第8回フォーラムは、「どうなるジェネリック（ジェネリックについて学ぼう!!）」と題して11月5日（月）に開催されるので多数の参加者を期待しています。詳細はホームページを参照。薬薬連携について、一部の地域では、病院薬剤師と薬局薬剤師との意思疎通の欠如が問題視されているが、まず顔を合わせなくては何も始まらない。フォーラムに参加しないで個別に相意見を出し合うこと自体がナンセンスではないだろうか。他の地区でも、多摩地区の連携を参考に大いに交流していただきたい。薬剤師の交流が、患者が信頼・安心して医療を受けられる、地域医療連携の第一歩だと考えている。

参考資料：

多摩薬薬連携協議会ホームページ

阿部宏子，多摩薬薬連携協議会の活動状況 —第5回多摩薬薬連携フォーラム 「お薬手帳の現状と課題」より— 都薬雑誌 Vol. 27, No. 12(2005)

下平秀夫，東京都病院薬剤師会中小病院部薬薬連携シンポジウム 2006. 02. 16

ちよっと漢方

—その5—

水分を摂っていますか

新宿に釣りが楽しめる居酒屋がある。先日会社の同僚の送別会がそこで開催され、コースとは別に鯛や平日、伊勢海老、サザエなどを釣ることができ、別料金ではあるが客の注文通りに料理してくれる。2時間飲み放題付きだ。どうもアルコールを飲みすぎ、その夜は身体がほてり、口渇がして寝苦しい。夜中に一・二度起きては麦茶を飲み、ようやく汗が出てほてりが収まった。

風邪の漢方治療では、葛根湯や麻黄湯などがよく使われる。葛根湯は7種類の生薬で麻黄湯は4種類。葛根湯は胃腸を整える生薬をベースに、首筋の凝りをとる葛根と汗を出す麻黄と桂皮が加わっている。一方、麻黄湯は今すぐにでも発汗さ

せて解熱するための生薬で構成されている。自ずとこの2種類の漢方薬の使い方は異なる。「インフルエンザに葛根湯を使うと今一つなんだよね」と聞くことがあるが、正にその通りである。葛根湯は、高熱をすぐにでも解熱させるような処方構成になっていないからである。葛根湯や麻黄湯を服用すると、一旦体が熱くなってから発汗、解熱してくるのが普通だ。でも、口渇があると話は別。水分が欠乏していれば汗は出てこない。ぜひ口渇の有無を確認して欲しいものだ。口渇があれば水分補給を忘れずに。

人間、水子と呼ばれる時期がある。水々しい肌をしている赤ちゃんのことを指すが、それ以降、歳月を重ねるごとに体内の水分比率は低下していく。80%台であった赤ちゃんの水分含量が、高齢者では時に50%台まで減少し、周りの温度変化に肌が敏感になる。生命活動に関する反応を維持するには、外部環境の影響を受けずに、ある一定幅の温度に保たれる必要がある。その大きな役割を果たすのが水だ。理科で習った『水の比熱は1』が人間にとってそんな意味があったとは。

ペンネーム 温故知新